

第40回やまぐち眼科フォーラムのご案内

謹 啓

先生方におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、この度、下記の要領にて第40回やまぐち眼科フォーラムを開催する運びとなりました。
万障お繰り合わせの上、ご出席賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

謹 白

【 日 時 】 2024年1月27日（土）

17:00～19:00 特別講演1,2

19:00～20:00 山口県眼科医会臨時総会

*尚、フォーラム終了後に山口県眼科医会臨時総会を開催いたします。

【 会 場 】 KAMEFUKU ON PLACE

山口市湯田温泉4-5-2

【 会 費 】 3,000円

プログラム

《特別講演Ⅰ》 17:00～18:00

座長：山口県眼科医会 会長

大西眼科 院長 大西 徹 先生

『 マイボーム腺疾患の診断と治療のエッセンス 』

演者：京都市立病院 眼科部長/京都府立医科大学 眼科臨床教授

鈴木 智 先生

《特別講演Ⅱ》 18:00～19:00

座長：山口大学大学院医学系研究科 眼科学

教授 木村 和博 先生

『 臨床に役立つもの作り（研究開発）へのとりくみと魅力 』

演者：佐賀大学医学部眼科学講座 教授

江内田 寛 先生

共催：山口県眼科医会 / 千寿製薬株式会社

1994年 京都府立医科大学 卒業
1996年 京都府立与謝の海病院 医員
2000年 京都府立医科大学大学院医学研究科 卒業
2000年 ハーバード大学眼科研究員 (5年間)
2005年 京都市立病院 眼科医長
2011年 京都市立病院 眼科副部長
2011年 京都府立医科大学 眼科客員講師
2020年 京都市立病院 眼科部長
2021年 京都府立医科大学 眼科臨床教授



『マイボーム腺疾患の診断と治療のエッセンス』

マイボーム腺機能不全 (MGD) ガイドラインが日本眼科学会雑誌2023年2月号に掲載された。MGDの定義は2010年と同様であるが、分泌減少型MGDの診断基準は少しながら変更されている。

さて、近年、眼瞼炎診療の重要性が取り上げられている。「眼瞼炎」は多くの異なる病態を含んだ疾患群であるが、眼瞼縁炎は睫毛根部を中心として生じる「前部」眼瞼炎と、マイボーム腺開口部周囲を中心として生じる「後部」眼瞼炎に分類される。そして後部眼瞼炎と関係するMGDやマイボーム腺炎は眼表面上皮障害との関わりで特に重要である。今回の講演では、マイボーム腺に関わる基本事項として、①性ホルモンや加齢に伴うマイボーム腺の変化、②マイボーム腺の脂質組成とその変化、③眼表面およびマイボーム腺の常在細菌叢の変化、そして④MGDとマイボーム腺炎について最近の知見を含めて解説する。さらに、マイボーム腺疾患の一つとして日常診療でよく遭遇する霰粒腫の病因論も交えながら、眼表面異常を伴うマイボーム腺疾患の診断と治療のエッセンスを要約する。

佐賀大学医学部眼科学講座 教授 江内田 寛 先生

1994年 福島県立医科大学卒業
2002年 九州大学医学研究院 助手 (眼科学分野)
2007年 国立病院機構九州医療センター眼科 医長・科長
2011年 九州大学医学研究院 講師 (眼科学分野)
2014年 佐賀大学医学部眼科学講座 教授



『臨床に役立つもの作り (臨床開発) へのとりくみと魅力』

医学研究の中には多様な形態が存在している。その多くは様々な病態の解明やあらたな治療法の評価などが代表例としてあげられるが、その中には臨床応用を念頭にした研究開発も含まれる。

代表例として橋渡し研究 (トランスレーショナルリサーチ) などあるが、これは基礎研究の成果を臨床へとつなげるための工程を一体的に捉えた開発戦略と定義される。ところが実際にその橋を渡るのは大変で、最終的に医薬品や機器の承認をうけるまでには、様々な困難を乗り越えなければならない。特に医薬品開発の場合、研究開始から承認取得まで多くの期間と開発費を要し、成功確立も低いいためハードルが高い。そのような環境の中で、我々はこれまで様々な形態であたらしい薬剤や医療機器開発に取り組んできた。

今回の講演では是非多くの先生方にも研究の一環としてもものづくり (研究開発) に取り組んでいただきたいと思い、自身がこれまで開発を行ってきた案件や現在取り組んでいる事例 (手術用ロボットやあたらしいOCT) を中心に、その内容や経験を伝えたい。